

アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛

—第8巻における愛の実体の探求—

九里 秀一郎*

要約

アウグスティヌスの著した『三位一体論』は全15巻から成る。彼は神の類比を人間の精神に探求する独自の研究を第8巻から始めた。神は愛という信仰にもとづいて、三位一体と精神に関する論理的な考察によって、彼は神の三位一体モデルを精神に作り上げた。このモデルは、別の観点からすれば、神に対する人間の愛と自己に対する愛を見事に表現したが、隣人愛については明瞭では無かった。本研究の目的は、アウグスティヌスの三位一体論をもとに、隣人愛について、このようなモデルを構築し、社会福祉の原理の構築に将来役立てることである。そのために、隣人愛の視点に立って、第8巻の最初から順に議論の再検討を行っている。今回は、第8巻の第6章から最終第10章を対象とした。聖霊と愛に対する信仰にもとづいて、アウグスティヌスは義の形やカリタスが内在する愛の実体を明らかにした。結論として、彼は愛の三位一体を探求方針として示した。この議論の中で、私たちはカリタスが神の愛、自己愛、隣人愛の調和したもので、むしろ、隣人愛が強調されていることを知る。そうならば、カリタスにもとづく三位一体論の当初の意図は、本研究の目的と完全に一致するのである。それは、アウグスティヌスが成し得なかった隣人愛の三位一体論の輪郭を明瞭にすることである。

キーワード アウグスティヌス 三位一体論 第8巻 カリタス

目次

- 1 序論
 - 1.1 本研究の目的
 - 1.2 本論の背景
 - 2 方法
 - 3 結果
 - 第6章 なぜ私たちが使徒を愛するのか。
 - 第7章 愛とは何か考究しなければならない。
 - 第8章 神と隣人を同じ一つの愛から愛する。
 - 第9章 なぜパウロの言葉に心が燃えるか。
 - 第10章 善の愛。
 - 4 考察
 - 4.1 義の形相に関する心理学的考察
 - 4.2 カリタスと愛の実体
 - 4.3 パウロに見る義の形相
 - 4.4 善の愛
 - 5 結論
- 凡例
引用文献・注
参考文献
図表

1 序論

1.1 本研究の目的

アウグスティヌスの著した『三位一体論』¹は全15巻から成り、前半はキリスト教の教理を中心とした解説、後半の第8巻からは独自の三位一体論である。彼はカリタス（愛）の信仰理解を基盤に人間の精神に神の似姿を探求し、第15巻で精神の三一性モデルを提案した。このモデルは記憶・知解・愛または意志からなる精神の三一性であり²、父・子・聖霊なる三位一体の神の類比である。筆者は、隣人愛の観点から三位一体論にもとづく社会福祉の原理を考察したいと考え、これまで第15巻を中心に考察してきた³。その結果、このモデルは自己愛を神のモデルとするものであって、モデルと隣人愛の関係は新たな課題であることが明らかになった⁴。

以上の経緯を踏まえ、本研究は、精神の三一性モデルが構築されるまでに、隣人愛の視点がどのように存在していたかを調査し、改めて三位一体論と隣人愛の関係を明らかにすることが目的である。具体的には、各プロセスでなされた多くの議論、および聖書の根拠について、隣人愛の視点から再検討することである。最初に、独自の議論の序論にあたる第8巻を対象に選んだ。この初期の構想段階では、彼が以前から善や愛について語っていることがらを背景として、広範な視点から三位一体を説き明かす可能性を論じている。

本論は第8巻を対象とした第三番目の論文で、第6章から最終第10章を対象とした⁵。全体を通じた主題は「三位一体論が描く隣人愛」である。各論文にはテキストの対象部分に応じた副題を設けた。第一論文では「信仰と真理の形而上学的対比」、第二論文では「回心する心の心理学的な分析」である。今回は「愛の実体の探求」を副題とした。愛の視点で三位一体論を探求する方針が示され、当初の段階では、愛の中でも隣人愛が決定的な位置を占めていたことが明らかにされる。

さて、今回対象とする第8巻第7章、8章には、愛（カリタス）の信仰理解が詳細に記されている。そこには、現代でも広く用いられる言葉がいくつかある。例えば、「君が愛を見るなら三位一体を見るのだ。」という言葉は、ローマ教皇が教会の社会教説の教えで用いている⁶。「私たちは神と隣人を同じ一つの愛から愛する。」「私たちは神のために神を、神のために自分自身と隣人を愛する。」は、カリタスの本質を表す言葉としてしばしば用いられる。

キリスト教の「愛」を表す語は、ギリシャ語ではアガペー、ラテン語ではカリタスが代表的である。スウェーデンの著名な神学者アンデレス・ニグレンは⁷、代表的な著書「アガペーとエロース」において、カリタスはアガペーとエロース⁸を総合したキリスト教の愛の完成であると言う。彼は、歴史的な視点から愛の多様性を論じる中で、アウグスティヌスの『三位一体論』第8巻を分析している。カリタスの卓越性を認めながらも、そもそもカリタスは神への愛と自己愛という、本来異なるものの総合であり、本質的な問題を内在している。それを十分理解するには、三位一体論の視点から解明する必要があると指摘する⁹。

ニグレンが言うように、神への愛と自己愛はそもそも対立するであろうか。本研究におい

ても、ニグレンとはまったく別の理由で、アウグスティヌスの三位一体論が自己愛に偏っていることを指摘している¹⁰。今回、愛の実体という視点で、カリタスと三位一体の関係を明らかにしたことにより、これらの問題に対する一定の成果が得られた。

1.2 本論の背景

ニグレンが言うように、アウグスティヌスにとって愛は彼の根幹にあり、『三位一体論』を執筆する前から多くの著作で語っている。例えば、司教として後輩の指導に用いたと言われる著作『キリスト教の教え』¹¹では、「人が神と隣人に対するふたつの愛を建てるところまでいかなければならぬ、まだ聖書を理解したとは言えない。」(教え1:36:40)と語る。『三位一体論』第8巻より前の巻も含めて、今回テーマとする「愛の実体」に関係するものをこれらの中からいくつか選び、本論の背景として以下に解説する。

最初は、『三位一体論』の直前に執筆を終えた自叙伝『告白』最終第13巻にある天地創造における聖霊と愛の解釈である¹²。愛の重さによって私たちが上昇したり下降したりする独創的な概念が示されている。『告白』に続いて執筆された『三位一体論』は、この聖霊と愛の概念が引き継ぎ、深化される。例えば第6巻では、聖霊が父と子を結ぶ神の表象として描かれ、聖霊と愛(charitas)の関係が論じられる。さらに、ヒラリウス¹³の三位一体論が引用され、聖霊と被造物の関係が論じられる。ヒラリウスはアウグスティヌスの三位一体論に大きな影響を与えた人物である。

(1) 『告白』第13巻：天地創造における聖霊と愛

キリスト教は新約聖書と旧約聖書の二つを聖典とし、両者は一体であるとする。神は一つであり、永遠であり、不変であるから、旧約聖書の神と新約聖書の神は当然同じである。しかし、旧約聖書には父・子・聖霊と顕わに書かれていないので、通常は旧約聖書から三位一体の神を解釈する¹⁴。アウグスティヌスは『告白』第13巻5章で、創世記冒頭にある次の二節に三位一体が認められると言う。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。(創1:1-2)

第7章には、この言葉をもとに聖霊と愛に関する巧みな解釈があり、「愛の実体」と密接に関係する¹⁵。まず、アウグスティヌスは「神の霊が水の面を動いていた。」に着目する。次に、「わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれている。」(ロマ5:5)という聖句を根拠にして、霊の賜物と呼ばれる聖霊が、水の面を覆う神の霊であると言う。混沌とした闇の深淵にある水とは「この世」である。私たちの心は、この世で「欲望の重圧」によって「下方に引き下げられ」、わたしたちがその内に没し、現れ出るのは「情念であり、愛である。」「わたしたちの不浄な霊が世のものに煩らう愛によって、私たちを下方に引き下げ、あなたの聖なる霊が確固不動のものを求める愛によって私たちを引き上げるのである。」「こうしてわたしたちは、わたしたちの心をその『霊が水の面を覆っている』あなたのもとに高めるのであり、わたしたちの心が『なんらの実体性を持たない水』を

乗り越えたとき、あの卓越せる休息に到達するのである。」と語る。

第9章では、聖霊のみが水の面を覆うていただけでなく、不変的な神性という意味ならば「父もまた子も水の面を覆うていたのではなからうか。」と、三位一体を示唆する¹⁶。水の面を覆うていた聖霊とは賜物であり、「わたしたちはあなたの賜物のうちに休み、そこにおいてあなたを楽しむ」ために、水の下に注がれた油が上昇するように、「愛が私たちをそこへ引き上げ」と言う。「わたしの重みは私の愛であり、わたしはどこに駆られようともそれによって駆られるのである。」と言う。「愛の重み」という表現は、「愛の実体」にふさわしいと思われる。

第10章では、創世記冒頭の三節目にある神の「光」にもとづいて、神と被造物の関係を解釈する¹⁷。次の言葉である。

神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。(創1:3)

この言葉は、賜物（聖霊）によって創造された被造物が神の照明を受けることであると、次のように解釈する。「被造物が前に不定で暗黒であったかのように語られているのであるが、それはかの被造物が前とは異なったものと、すなわち不変の光に向けられて光となった原因が明らかにされるためである。」次の新約聖書の二つの言葉も、根拠として示され説得力を増している。「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らす」(ヨハ1:9)、「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。」(エペ5:8)

第11章では、人間の「存在」と「認識」と「意志」の三つが三位一体の象徴であると語る¹⁸。アウグスティヌスは三位一体論を執筆する以前から、人間の精神と神の三位一体を対比する方法を用いるのである。

(2) 『三位一体論』第6巻：三位一体における聖霊と愛

第6巻2章では、次のヨハネによる福音書の冒頭の言葉から、聖霊によって父と子が結合する三位一体像を描く。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。(ヨハ1:1-2)

言が子に、言と共にあった神が父に対応する。キリスト教では、父と子は万物が創造される前に共に存在したと信じられている。福音書の中で、イエスはしばしば「わたしと父とは一つである。」(ヨハ10:30)と語る。アウグスティヌスは、この父と子の統一性を保持するのが聖霊であると、第6巻5章で次のように語る。

明らかなことは、聖霊は父と子の或る一つではないということ、聖霊によって父と子のペルソナは結合され、聖霊によって生れたお方は生むお方から愛され、また生れたお方は生みたまうたお方を愛すること、さらに父と子は関与によってではなく、その本質によって、またよりすぐれた或る方の賜物によってではなく御自身の賜物によって、平和の紐帯において霊の統一性を保持している(エペ4:3)ということである。(6:5:7:1)

聖霊は父と子の賜物であり、聖霊によって父と子が結合され、平和の紐帯において霊の統一性が保持されると言う。続いて、父と子と同じように、私たちと神が聖霊によって一つに

なることを、次のように語る。

私たちはこの神から、この神をとおして、この神において浄福なのである。それは私たちがこの神の恩恵の贈物によって一つのものにされ、この神と共に一つの霊であるからである。それというのも私たちの魂はこの神の背後に堅く膠でつけられているからである。私たちにとって神に寄り縋ることは善いことである。(6:5:7:1)

神から恩恵の賜物が私たちに与えられ、それによって私たちと神が一つのものにされ、神と共に一つの霊であると言う。聖霊を^{ひも}紐、あるいは^{にかわ}膠と表現する点は興味深い。父と子を一つにするのが聖霊であり、私たちと神を一つにする恩恵も同様であると言う。続いて、別の観点から、父と子をむすぶカリタス（愛：charitas）について、次のように語る。

それゆえ、聖霊は父と子の、それがいかなるものであれ、或る交わりである。しかも、この交わりそのものは共に実体的であり、共に永遠的である。このことが親愛（amicitia）という言葉でふさわしくも言われ得るなら、そのように語ってもよい。しかし愛（charitas）と語られる方が一層適切である。この愛も実体である。聖書に記されているように、神は実体であり、「神は愛である」（ヨハネ I 4:16）から。(6:5:7:2)

聖霊は交わりであり、交わりそのものは実体的である。それは、カリタスと呼ぶのにふさわしく、聖霊が愛と呼ばれるのにふさわしい実体であると主張する。こうして、次のような三つのペルソナを具体的に語る。

三つとはつまり、彼から由来する者を愛する一つなるお方、彼の存在が由来するお方を愛するお方、そして愛そのものである。もしこの愛が神でないなら、どうして、「神は愛である」であろうか。もし愛が実体でないなら、どうして神は実体であろうか。(6:5:7:2)

ここに「愛の実体」という副題が、文字通り用いられている。三つのものの最初は父である。次は子、そして最後の「愛そのもの」は聖霊である。聖霊は父と子を結び、なお私たちをも父と子に結び付けられる至高の愛であると語る¹⁹。アウグスティヌスは、神に対する物質的イメージを繰り返し否定するが²⁰、聖霊を接着剤である糊や膠と表現する点は分かりやすい²¹。

以上のように、第6巻のこの部分では、信仰にもとづく自由な発想にもとづいて、父と子と聖霊が愛の三一性において一つであると語っている。このことを踏まえれば、第8巻以降は、自由な信仰理解を、真理にもとづく理性によって取り組む営みと言える。

(3) 『三位一体論』第6巻：ヒラリウスの三位一体論

ヒラリウスは、当時既に存在した三位一体論の中から、唯一名前を挙げて引用された人物である²²。アウグスティヌスがヒラリウスの表現に隠された意味を探索したと語る第6巻10章の概要を以下に記す。

ヒラリウスは三位一体のペルソナの特性について、「御父における永遠性、像における^{かたち}貌、贈物における使用」と語った。「子」が「像」、「聖霊」が「贈物」に対応する。

この像はいわば全き御言である。そこには欠如しているものがなく全能にして知恵のある神の或る作品がある。それは生きておるものの不可変的なすべての根拠に満ちている。(6:10:11:2)

子が御言と言われるように、像が御言である。父と像はひとつの神であり、その神の作品として被造物があり、永遠性の根拠に満ちている。ここでは、貌を作品と表現し被造物を表している。万物が御言によって創られたという聖書の言葉に対応する。さらに、父と像がひとつであることを「抱擁」と言い、ヒラリウスがそれを「享受」と名づけ、それが聖霊であると次のように語る。

父と像との言詮を絶するこの抱擁は享受なくして、愛なくして、歡喜なくしては存在しない。この愛、悦び、祝福または淨福とたとい人間の或る言葉でふさわしく言い表わされるにしても、ヒラリウスはこれを簡潔に享受と名づけたのである。すなわち、三位一体における聖霊である。(6:10:11:3)

享受とは「あるものにひたすらそれ自身のために愛をもってよりすぎることを意味する²³。父と像は享受において一つであり、それは聖霊であると言う。さらに、聖霊が被造物に浸透することを次のように語る。

聖霊は生れず、産出者と産出された者との甘美であり、尽し得ぬほど大きな寛容と豊かさによって被造物全体にその受容能力にふさわしく浸透して、被造物がその秩序を保持し、その場所に安堵できるようにしたまうのである。(6:10:11:3)

アウグスティヌスはしばしば、聖霊は子のように生まれたのではないと言う²⁴。ここでは「甘美」と表現されており、上記(2)で聖霊を紐ひもとか膠にかわとか表現した類である。聖霊は父と子の統一性に関与するだけでなく、聖霊が被造物全体に浸透して、その場所に安堵することにより、神と被造物の統一性に関与すると言う。それゆえ、次のように、被造物を通して神を知ると語る。

造られたものを通して知解された創造主を認識して(ロマ1:20)、私たちは三位一体なる神を知解するにしなければならない。その跡はふさわしい仕方で被造物のうちに顕れているのである。実に、あの三位一体において、すべてのものの最高の根源、また完全極まりなき美、この上なく清らかな喜びがあるのである。(6:10:12:1)

これは三位一体論の基本的な方法であると同時に、三つのペルソナに関する基本的な理解を示している。すなわち、父は「すべてのものの最高の根源」、子は「完全極まりなき美」、聖霊は「この上なく清らかな喜び」である。被造物に見られる神性について、具体的な内容を以下の様に記している。

神的な御業によって造られたすべてのものは、或る統一性と姿と秩序を自らのうちに示すのである。これらのいずれも、例えば物体の本性或魂の天賦の能力のように或る一つのものである。それは物体の形や性質のように、また魂の教えや知識のように、或る形相(species)によって形成される。またそれは物体の重さや位置のように、さらに魂の愛や喜びのように或る秩序を求め、保持する。(6:10:12:1)

ここに示された多くの課題は第8巻で論じられている²⁵。従って、アウグスティヌスの独自の三位一体論は、第6巻のヒラリウスの説の検討が実質的議論の始まりと言える。

2 方法

本研究は第8巻を四部に分けて順次考察を加えている。今回は、前回とまったく同様の方法で第6章～10章の要約を行い結果にまとめる。以下の表によって、第8巻の全体像を把握出来る。

表1 第8巻の構成

部	章	見出し	聖句引用数	愛	神	心	善	義人	義	兄弟	隣人
I	序	信仰の真理。			9		6				
	1	真実と偉大さ。									
	2	人間の心の物的性質。	2		15	7					
	3	善の中に生き、動き、存在する人間。	2	9	6	49	85				
II	4	知られないものが愛され得るか。	5	12	11	10					
	5	神を知解する類似と比較が問われる。		12	9						
III	6	なぜ私たちが使徒を愛するのか。	1	35		46		47	22		
	7	愛とは何か考究しなければならない。	14	33	23						7
	8	神と隣人を同じ一つの愛から愛する。	7	92	46					18	
	9	なぜパウロの言葉に心が燃えるか。	9	14	8						
IV	10	善の愛。		18							
計				225	127	112	91	47	22	18	7

注：別添表1をもとに単語の数を集計。聖句は新約聖書のみ、節単位の総数。

内容を概観するために、各章で使用頻度の高い単語の数を表示した。「愛」の語の使用頻度が際立って高いことは、愛にもとづいて三位一体論を探求しようとする確実な証拠である。アウグスティヌスは、理性で明らかでないことは聖書に立ち帰り、信仰によって祈り求める探求スタイルである²⁶。聖句の引用が多い部分はそのことと密接に関係する。今回、第6章から8章は聖句の引用数が特に多い。従って、信仰に根ざして語る部分であることを、あらかじめ了解する必要がある。考察では、序論で示したように「愛の実体」の視点にもとづいて検討する。信仰的な側面が強いこともあり、愛と三位一体論との関係をより広い視野で検討する。

3 結果

以下は、『三位一体論』第8巻第6章～10章の段落ごとの要約である。これまでと同様に、第8巻全文デジタルデータを使って編集した。今回は、従来のテキストに加えて出版年の新しい日本語訳、英語訳を一部参考にした²⁷。

第6章 なぜ私たちが使徒を愛するのか。

8:6:9:1 私たちは知っていることに基づいて義なる心を愛する。

なぜ私たちが使徒を愛するのか、考察しよう。私たちが彼において愛しているものは今もなお生きていると信じる。すなわち、私たちは義なる心を愛しているのである。だから、心とは何か、義人とは何か、ということ私たちが知っているゆえでないなら、いかなる類的あるいは種的な規則に基づいてそうするのであろうか。

8:6:9:2 自身の心に基づいて他人の心を知る。

心とは何か、ということは、私たち自身心を持っているからこそ知っていると言うのは尤もなことである。私たちは決して肉眼で心を見たことはないし、また私たちが見た他の多くのものとの類似から心についての類的・種的な観念をつくるのでもなく、むしろ私が今語ったように、私たち自身が心を持つから心の存在を知るのである。私たちは私たち自身の心に基づいて他人の心を知り、私たちが知らないものを私たちの心に基づいて信ずるのである。私たちは心の存在を意識するのみではなく、自分自身を考察することによって、心とは何かを知り得るのである。それは、私たちが心を持っているからである。

8:6:9:3 自身の心に基づいて義人を知る。

しかし、義人とは何かについて、私たちはどこから知るのであろうか。私たちは心とは何かを知っているように、義人とは何かを知っている。すでに語られたように、心とは何か、ということは私たち自身に基づいて知るのである。それは心が私たちに内在しているからである。

8:6:9:4 義人であろうと欲する人は義人を知っている。

ところが、もし私たちが義人でなければ義人とは何であるかということ、誰も知らないなら、義人でなければ義人を愛さないことになる。もし類的・種的な知識の或る規則に基づくのでないなら、信じるが見ていない誰をも愛し得ない。しかし、まだ義人ではない人が義人となり得るように義人であろうと欲するのである。それゆえ、まだ義人ではない人も、義人とは何か、ということを知っているのだ。

8:6:9:5 自分自身のもとでのみ義人とは何かを見出す。

義なる人間と言われるとき、心について言われる。義とは心の或る美しさである。この美しさによって人間はたとい、しばしば身体が損傷を受け醜くあろうとも美しいのである。私たちがまだ義人でないときも、義人とは何かということどこで知るのであろうか。私がこのことを言い表わそうと問い求めるとき、私は自分自身のもとでのみそれを見出す。そして私が義人とは何か、ということや或る人に問うなら、その人は自分自身のもとで何と答えるべきか問い求める。この意味で、真実を答え得る人は自分自身のもとで何と答えるべきかを見出すのである。

8:6:9:6 想像して語り、想像して他人の言葉を信じる。

さて、私がカルタゴについて語ろうとするとき、私は自分自身のところで語ろうとすることを問い求め、自分自身のところでカルタゴという表象を見出すのである。なぜなら、私は

かつて身体をもってそこに滞在し、それを見、感覚し、そして自分の記憶によって保持し、それゆえ、自分のもとでカルタゴという表象について言葉を見出すから、つまり、私の記憶の中にあるカルタゴの表象そのものがその言葉である。私がまだ見たことのないアレクサンドリアについて語ろうとすると、アレクサンドリアの想像が私のもとに現存する。私は多くの人から聞いて、やっとのことで、その都市の似像を作ったのである。その似像を語ろうとすると、私のもとにあるアレクサンドリアの言葉である。そして私は自分の心の中でそれを、つまり、アレクサンドリアのいわば画像のごとき似像を直視しつつ、私はその通りであるか知らぬのであるが、見たものを保持している人々の言葉を信じるであろう。

8:6:9:7 義なる心とは何かを見る形相そのものを愛する。

しかし、義人とは何であるか、ということは、私の眼で見たようなものではなく、または或る感覚で知ったようなものでもないし、また、そのように知った人々から私が聞くようなものでもない。「義なる心とは、自分の生活と行状における知識と理性によって各人にその持前を配分するものである」と私が語り、そのことを知りつつ語るとき、たとい私自身はどのように認める当のものではなくとも、自分のところで認め、そして私からそのことを聞き、納得して同意をなす人はだれでも、彼自身はたとい自分が認める当のものでなくても、自分自身のもとで私と同じことを認めるのである。義人が義について語るなら不思議ではない。しかし、心が他のところでは決して見ないものを自分自身のもとで見ること、真実の義なる心そのものを見ること、は不思議なことである。すべての人が義なる心とは何かということを見て語り得るように義なる心そのものではない。彼らがそこから形成され、義なる心になるため、彼らが直視する形相に彼ら自身固着することによらなければ、どうして義なる心であり得ようか。彼らは、自分の生活と行状における知識と理性によって、各人にその持前を配分する心が義であることを認め、語るのみではなく、彼ら自身も互いに愛し合うこと以外誰にも負債を持たない（ロマ13・8）ように、各人にその持前を配分することによって正しく生き、正しい行状を持つようにしなければならない。ところで、愛することによらなければ、どうしてこの形相に固着しようか。それではなぜ、私たちが義人であると信じる他人を愛して、しかも私たちも義なる人になり得るため、義なる心とは何かということをそこで見る形相そのものを愛さないであろうか。私たちがこの形相を愛さなかったなら、私たちがこの形相に基づいて愛する人を決して愛さないであろうか。しかし私たちが義人ではない限り、この形相への愛は私たちが義人となり得るためには余りにも弱いであろうか。

8:6:9:8 自分が知解する義人の形相と真理に基づいて愛する。

だから、義人であると信じられる人間は、愛する人が自分のもとで認め知解するこの形相と真理に基づいて愛されるのである。ところが、形相と真理はそれ自身以外からは愛されない。なぜなら、私たちは形相と真理以外の処では、そのような或るものを見出さず、したがってそれが知られていないときは、すでに私たちがそのような或るものを知っているものに基づいて信じつつ愛するであろうから。君がそのようなものとして見るであろうものはみなすでに形相と真理である。他にそのようなものは存在しない。それのみがあるがままのそ

れ自身であるからである。

8:6:9:9 人間は義人か義人であり得るかによって愛する。

だから、人間を愛する人は彼らが義人であるゆえにか、あるいは義人であり得るためにか、愛すべきである。かくて、彼は義人であるゆえか、義人であり得るために、自分自身を愛さなければならない。それで、彼はいかなる危険もなしに、自分自身のように隣人を愛するのである。これと異なる仕方でも自分を愛する人は不正に自分を愛する。真実に自分を愛さないからである。実に、「不正を愛する人は自分の魂を憎むのである」(詩10・6)。

第7章 愛とは何か考究しなければならない。

8:7:10:1 真実の愛とは真理に固着して正しく生きること。

このゆえに、三位一体について、また神を知ることについて、先ず考究しなければならないことは実に真の愛とは何か、いなむしろ愛とは何か、ということである。けだし、真実なものこそ愛と言われなければならない。そうでないなら、それは欲望である。真実の愛とは、私たちが真理に固着して正しく生きることである。それゆえ、私たちがその愛によって彼らが正しく生きることを欲するあの人間への愛のため、すべての可死的なものを軽視しよう。かくて私たちは主イエス・キリストが御自身の模範によって私たちに教えられたように、兄弟の益となるため死ぬことが備えられ得るであろう。

8:7:10:2 神を愛する人は必然的に隣人を愛する。

確かに律法と預言者全体が懸っている二つの戒め、すなわち、神の愛と隣人の愛(マタイ22・37-40)に対して、聖書がしばしばこの二つの戒めの代りに一つの戒めを置くのは理由のないことではない。多くのテキストが示すように、神の愛のみが語られている。神を愛する人は必然的に神が命じたまうことを為すからである。彼らがそれを為す限り神を愛するのである。だから、必然的に彼は隣人を愛するようになる。神がこのことを命じたまうからである。

8:7:10:3 隣人を愛する人は必然的に、愛そのものを愛し、愛である神を愛する。

聖書は或る場合には隣人の愛のみを語る。例えば、「互いに重荷を負いなさい。そうすればあなたがたはキリストの律法を充たすであろう」(ガラテヤ6・2)、また、「すべての律法は一語に、すなわち、自分自身のようにあなたの隣人を愛せよ、と記されていることに含まれる」(ガラテヤ5・14)、さらに、福音書に、「人々があなたがたに為して欲しいと望むことはみな、あなたがたも彼らに為しなさい。これが律法であり預言者である」(マタイ7・12)と記されている。聖書にはこの他に、神の愛については言及されず、隣人の愛のみが戒めを完成するよう見える多くのテキストがある。律法と預言者は、神の愛と隣人の愛というこの二つの戒めに懸っている。しかしそれは隣人を愛する人は必然的に、とりわけ愛そのものを愛するからである。さて「神は愛であり愛の中に留まる人は神の中に留まる」(ヨハネI 4・16)。だから、その人は必然的にとりわけ神を愛するのである。

8:7:11:1 実に神はこの内面にこそおられる。

世を支配する権能によって神を問い求める人々は神から引き離され遠く散らされる。しかしこれは場所の離隔によるのではなく、情念の多様性による。彼らは外に行こうと努めて、自分の内面を見棄てるのであるが、実に神はこの内面にこそいましたまう。神の憐れいが与えられる敬虔な意志によって全能者に結合されるほうが一層力強いのである。そこで、主イエス・キリスト御自身が永遠的なもの、内的なものへ向き変えるためである。そこで主は語りたまう、「労苦する者、重荷を負う者、我に來れ、我汝らを休ません。わが軛を汝らの上に取り」(マタイ11・28)。「我に学べ。我は柔和にして心低き者なればなり」と言いたまう。それはこの上なく堅固な謙虚〔低み〕は、この上なく空しい高ぶり〔高み〕よりも力あり安全であるから。それゆえ、主はつづいて、「されば汝らの魂に憐れいを見出さん」と言いたまう。なぜなら、「愛は驕らず」(コリント前13・4)、「神は愛である」(ヨハネI 4・8)からである。視よ、「神は愛である」。もし私たちが神の御許にあることを欲するなら、自分たちのもとに居られるお方を問い求める私たちが、どうして天の高みと地の低きへ走り行くであろうか。

第8章 神と隣人を同じ一つの愛から愛する。**8:8:12:1 彼に兄弟を愛させればこの同じ愛を彼は愛する。**

誰も、私は何を愛するのか知らない、と言ってはならない。兄弟を愛させよ。そうすればこの同じ愛を彼は愛するのである。というのは、彼は愛する兄弟よりも、彼にそのように愛させる愛のほうをよく知っているからである。視よ、彼は兄弟よりもよく知られている神を持ち得る。つまり、神がより現在の、内的で、确实であるからである。神である愛をかき抱き、愛において神をかき懐け。私たちと彼らを相互に結合し、私たちを神に服従せしめるのが実に愛そのものである。だから、私たちは高ぶりの腫脹から癒されればいやされるほど、愛においてより満たされるのである。

8:8:12:2 君が愛を見るなら、君は三位一体を見る。

「私は愛を見る。そして出来る限り、精神によって愛を見る。また私は聖書が、『神は愛である。愛に留まる人は神に留まる』(Iヨハ4・16)と語るのを信じる。しかし私は愛を見ると、そこで三位一体を見るのではない。」と(言う人がいる)。そんなことはない²⁸。君が愛を見るなら、君は三位一体を見るのだ。しかし、私は出来るなら、君が三位一体を見ることを君に見させるため気づかせよう。すなわち、私たちが愛によって或る善へ動かされるために三位一体のみを現在せしめよ。

8:8:12:3 私たちは神と隣人を同じ一つの愛から愛する。

私たちが愛を愛するとき、愛そのものも愛され得るために愛は何を愛するのであろうか。それは、私たちが近くにあるものから出発するために、兄弟である²⁹。使徒ヨハネが、「自分の兄弟を愛する人は光の中に留まり、彼には躓きがない」(Iヨハ2:10)と言って、義の完成を兄弟愛に置いていることは明らかである。というのは、同じ手紙の少し後で、極めて明白に次のように言っているからである。「いとも愛する者よ、互いに愛し合おうではない

か。愛は神から来るからである。愛する者はみな神から生れ、神を知る。愛さない者は神を知らない。神は愛であるから」(Iヨハ4:7-8)。この言葉は十分明らかに、同じ兄弟愛そのものが神から来るだけでなく神でもあることを非常な権威をもって言われていることを示している。したがって、私たちが愛によって兄弟を愛するとき、兄弟を神によって愛するのである。言い換えると、私たちに兄弟を愛させるその愛を先ず愛さないということとはあり得ない。ここで結論づけられることは、あの二つの戒めは相互の関係なくしてはあり得ないということである。たしかに、「神は愛である」(Iヨハ4:8) ゆえに、愛を愛する人は確実に神を愛するのである。また兄弟を愛する人は必然的に愛を愛するのである。それゆえ、使徒ヨハネは少し後で、「見ている兄弟を愛さない人は見ていない神を愛することは出来ない」(Iヨハ4:20) と言う。さらに神に居ない人は愛に居ない。「神は光であり、神には暗闇はない」(Iヨハ1:5) から。だから、見ている兄弟を愛さない人は、神は愛であり、しかもこの愛は兄弟を愛さない人には欠けているゆえに見ていない神を、どうして愛し得ようか。私たちは神と隣人を同じ一つの愛から愛するのである。しかし私たちは神のために神を、神のために自分自身と隣人を愛するのである。

第9章 なぜパウロの言葉に心が燃えるか。

8:9:13:1 義の不可変的な形相に基づいてパウロを愛する。

「視よ、今は恵みの時、視よ、今は救いの日である。」(コリント後6・2-10)。私たちがこのような言葉を読んで使徒パウロへの愛に燃え立たしめられるのは、どうしてであろうか。神の奉仕者はこのように生きるべきであるということは、内的に私たち自身において、真理そのものにおいて凝視するのである。このように生きたと信ずる彼を私たちが見るこのもの〔形相〕に基づいて愛するのである。私たちがこの形相を何よりも先ず愛するのでなければ、彼を愛さないであろう。私たちは或る人がそのように生きたと信ずる信仰によって、より烈しく形相そのものの愛へと促されるのである。あの形相への愛が、私たちに彼らの生き様を愛させ、彼らの生が私たちに同じ形相への一層燃え立つ愛を促すのである。なぜなら、私たちは神において人間がそれによって生きるべきであると判断する義の不可変的な形相を観るからである。だから、信仰はより明白に知られ、より堅く愛されるように神の認識と愛に有効なのである。

第10章 善の愛。

8:10:14:1 聖書の愛は善の愛である。

しかし、聖書がこれほど賞揚し告知する愛 (dilectio, caritas) は、善の愛 (amor) でないなら、一体何であろうか。

8:10:14:2 愛する人と愛されるものと愛の三つがある。

しかし愛は或る愛する人の愛であり、愛によって或るものが愛されるのである。視よ、ここに三つのものがある。愛する人と愛されるもの、そして愛である。したがって愛とは愛す

る人と愛されるものという二つを一つにし、あるいは一つにしようとする或る生命でないなら、何であろうか。それは外的・肉的な愛についてもあてはまる。しかし、より純粋にして明らかな源泉から汲み取るために。私たちは肉を背後に措き精神に向って上昇しよう。友人において精神は精神以外の何を愛するであろうか。それゆえ、ここにも三つのもの、すなわち、愛する人と愛されるものと愛があるのである。ここから私たちはなお上昇し、人間に許される限り、より高いものを問い求めて行かなければならない。

8:10:14:3 求めるべき場所を見出したので休息しよう。

しかし、問い求めていたものをすでに見出したと思わないように、ここで暫く私たちの注視力を休ませよう。それは、或ることをそこで問い求めるべき場所を見出した人がよく休息する場合のようにである。しかしまだ問い求めていたものを見出したのではなく、それを問い求める場所を見出したのである。私たちは、あたかも始めの経から残りの緯を織り出し得るように、このことを語ったことで満足しよう。

4 考察

4.1 義の形相に関する心理学的考察

第6章のテーマは、「なぜ私たちが使徒を愛するのか」である。これは5章末にある、「私たちは三位一体をどのように信じ愛するのか。私たちに使徒パウロを愛するようにさせる種的・類的な知識によってであろうか」(8:5:8:1)という課題の具体的検討である。第6章は九つの段落で構成される一つの長い節である。この第9節の要約作業で各段落に付した見出しは以下の通りである。

第6章 なぜ私たちが使徒を愛するのか。

8:6:9:1	私たちは知っていることに基づいて義なる心を愛する。
8:6:9:2	自身の心に基づいて他人の心を知る。
8:6:9:3	自身の心に基づいて義人を知る。
8:6:9:4	義人であろうと欲する人は義人を知っている。
8:6:9:5	自分自身のもとのみ義人とは何かを見出す。
8:6:9:6	想像して語り、想像して他人の言葉を信じる。
8:6:9:7	義なる心とは何かを見る形相そのものを愛する。
8:6:9:8	自分が知解する義人の形相と真理に基づいて愛する。
8:6:9:9	人間は義人か義人であり得るかによって愛する。

第1段では「私たちは、心とは何か、義人とは何かを知っていて、義なる心を愛している。」(8:6:9:1)という仮説が立てられる。結果の要約からも明らかなように、第2段から6段までは、知ることの心理学的考察とも言える。第7段で「形相」という概念が導入され、「義人は人の心にある形相にもとづいて知る。」と語る。次の第8、9段にある言葉が結論である。

だから、義人であると信じられる人間は、愛する人が自分のもとで認め知解するこの形相と真理に基づいて愛されるのである。(8:6:9:8)

だから、人間を愛する人は彼らが義人であるゆえにか、あるいは義人であり得るためにか、愛すべきである。(8:6:9:9)

「義の形相」とは、端的に表現するならば、人が経験と知性にもとづいて形成する固有の義人像である。この義人像はまったく各人固有のもので、本人以外誰も関与できず、義でない普通の人も持ち得るといふふしぎさを強調しつつ論じられる。

4.2 カリタスと愛の実体

序論で述べたように、アウグスティヌスは三位一体論を執筆する前から、愛について多くを語っている。特に、『キリスト教の教え』第1巻では、カリタス（愛）の概念が明確に記されている。第7章8章では、カリタスについて、さらに精緻な議論が行われ、三位一体の神を探求する方法としての可能性が検討される。本論では、それを「愛の実体」という視点から考察する。カリタスをエロースとアガペーの総合とするニグレンの見解についても、合わせて検討される。

(1) 神と隣人に対する二つの愛の掟

掟を与えた神と掟を守る人間という関係では、それが愛の掟であれば、愛とは何か知らなければ掟にはならない。第7章では、カリタスを構成する二つの愛の掟について、愛の実体の視点から考察する。この章は四つの部分で構成され、各段落の見出しは以下の通りである。

第7章 愛とは何か考究しなければならない。

8:7:10:1	真実の愛とは真理に固着して正しく生きること。
8:7:10:2	神を愛する人は必然的に隣人を愛する。
8:7:10:3	隣人を愛する人は必然的に、愛そのものを愛し、愛である神を愛する。
8:7:11:1	実に神はこの内面にこそおられる。

この章は、全ての章の中で聖書の引用が最も多く（14回）、信仰理解を中心とした章であると考えられる。使用される単語は、「愛」が33回、「神」が23回、この章のテーマに直結する「隣人」が7回である（表1）。次の聖句が、二つの愛の掟と言われる。

イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。(マタ22:37-40)

信仰の核心を正しくつかむため、第8巻で引用されている聖句の中で特に重要なものを探したい。その方法として、筆者の引用聖句に関する研究結果の一覧表を参照すると、第8巻と第15巻の両方で引用されている聖句が容易に抽出できる³⁰。全巻での引用数の多い順に並

べると以下のとおりである。

- ① わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。(Iヨハ4:16)
- ② 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。(Iヨハ4:8)
- ③ 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。(マタ22:40)
- ④ 希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。(ロマ5:5)

以上の聖句をもとに第7章を検討したい。まず、アウグスティヌスは、第一の掟から、(a)「神を愛する者は必然的に隣人を愛する。」と言う。なぜなら、神を愛する者は、当然律法を守るはずで、律法には隣人を愛することが定められているからである³¹。聖句③によれば、律法全体は、この二つの掟に集約されると言い、パウロは「律法全体が隣人を自分のように愛しなさいという一句によって全うされる。」(ガラ5:14)と、一つの掟に集約する。

次に、第二の掟から、アウグスティヌスは、(b)「隣人を愛する者は必然的に神を愛する。」と言う。なぜなら、隣人を愛する人は必然的に、とりわけ愛そのものを愛し、神は愛であるから。愛する人が神と一体のように記されている聖句①、②が重要な根拠である。

このように、神と私たち、隣人の三者の関係について次の二つが論証される。

- (a) 神を愛する者は必然的に隣人を愛する。
- (b) 隣人を愛する者は必然的に神を愛する。

この二つは、人が神を愛すること、隣人を愛することが一体であることを示し、人間に愛の実体が存在することを示唆する。このような実体の存在によって、「神と隣人を同じ一つの愛から愛する」(8:8:12:3)というカリタスの特性が導かれる。

そのような愛が「神から注がれている」(④)とするのが信仰である。隣人を愛することによって、あるいは信仰によって、いずれにせよ愛の実体が存在することなく、神も、他者も愛することは出来ない。このような愛の実体を、この章の始めでは「真実の愛」と呼び、「真理に固着して正しく生きる愛」と表現する。また、章の終わりには、「主に依り頼む人は真理を悟り、信じる人は主の愛の内に主と共に生きる。」(知恵の書3:9)を引用して、神は愛であり、その神が自分たちのもとに居られると語る。

(2) 神の愛と兄弟に対する愛

第8章は三つの段落から成り、各段落の見出しは次の通りである。

第8章 誰でも兄弟を愛すべきことは知っている。

8:8:12:1	彼に兄弟を愛させればこの同じ愛を彼は愛する。
8:8:12:2	君が愛を見るなら、君は三位一体を見る。
8:8:12:3	私たちは神と隣人を同じ一つの愛から愛する。

前章と同様に聖書解釈が中心である。この章では、「愛」が92回、「神」が46回使用され、この二つの語については他の章と比較して圧倒的に多い(表1)。この章のテーマに関係する「兄弟」が18回使用されており、他の章には見られない。以下の聖句が最初から順に引用されていて、すべてヨハネによる第一の手紙の言葉である。

- ① 神は愛である。愛に留まる人は神に留まる。(Iヨハ4:16)
- ② 兄弟を愛する人は、いつも光の中におり、その人にはつまずきがありません。(Iヨハ2:10)
- ③ 愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。(Iヨハ4:7)
- ④ 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。(Iヨハ4:8)
- ⑤ 「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。(Iヨハ4:20)
- ⑥ 神は光であり、神には闇が全くないということです。(Iヨハ1:5)

第8章では、これらの聖書の言葉を引用して「兄弟愛」を論じる。前半の第1, 2段落では³²、聖句①の解釈、後半の第3段落では、聖句②～⑥を引用して二つの愛の掟(マタ22:37-40)を解釈する。以下では、第8章を前半と後半に分け最後にまとめを行う。

A. 君が愛を見るなら、三位一体を見る。

第8章前半(8:8:12:1-2)では、「神は愛である。愛に留まる人は神に留まる。」(①)という聖句を拠り所に、すべての人間に対して、「誰でも愛を見るなら三位一体の神を見ることができる。」と語りかける。そして、この言葉は兄弟を愛することによって実現すると語る。序論でも紹介したように、現代のローマ教皇も教会と社会をつなぐ目的で、同様の主旨でこの言葉を用いている。アウグスティヌスにとって「兄弟」「隣人」という語の違いを特別意識していないようである。その理由は、隣人とは誰かという問いに対して、目の前の助けを必要とするすべての人間であると語るからである。そのことは、『キリスト教の教え』の中で、聖書のサマリア人の例え話を引用して明確に語っている³³。

B. 兄弟愛そのものが神である。

第8章後半(8:8:12:3)では、二つの掟と上記の聖句①～⑤を用いて兄弟を愛することを論ずる。要点は以下のとおりである。

- a. 使徒が義の完成を兄弟愛に置いていることは明らかである。(①、②)
- b. 同じ兄弟愛そのものが、神から来るだけではなく、神でもあることを非常な権威をもって言われている。(③、④)
- c. 私たちが愛によって兄弟を愛するとき、兄弟を神によって愛するのである。(二つの掟、③、④)
- d. 愛を愛する人は確実に神を愛するのである。また兄弟を愛する人は必然的に愛を愛するのである。(二つの掟、③、④)
- e. 兄弟を愛さない人は愛に居らず、愛に居ない人は神に居ない。(⑤、⑥)

d.の内容は、二つの掟について前述した第7章と同じである。b.では、兄弟愛そのものが神であるという極端な表現がある。アウグスティヌスが、このような聖書理解に立って、さらに「愛の実体」という視点で考察したことを示すため、「愛そのもの」という表現が使われている部分を以下に示す。

- a. だから、愛そのものも愛され得るために愛は何を愛するのであろうか。実に何ものも愛さない愛は存在しない。
- b. 使徒はもしこの兄弟愛そのものにおいて神が理解されるのを欲しなかったなら、決してそうしてはいなかったであろう。
- c. この言葉は十分明らかに、同じ兄弟愛そのものが一なぜなら、兄弟愛は私たちをして互いに愛させるものであるから一、神から来るだけではなく神でもあることを非常な権威をもって言われていることを示している。
- d. 人間の眼で見る兄弟を、もし霊的な愛によって愛するなら、愛そのものであられる神を内的な眼一それによって神は見られ得るのである一で見るであろう。

「兄弟愛そのもの」、「愛そのもの」という表現は、愛の実体と考えられる。これらを神であるとさえ言う。愛の実体は、三位一体論のひとつのペルソナとしての可能性を探るためであり、第8章の最後では、この点について以下の様に言及する。

私たちは神と隣人を同じ一つの愛から愛するのである。しかし私たちは神のために神を、神のために自分自身と隣人を愛するのである。

「同じ一つの愛」というのは、神の愛と兄弟愛が同じ愛という意味であり、神と自分自身と隣人の3者における三位一体の表現とも言える。あるいは、神への愛・自己への愛・隣人への愛の三つが調和して一つの愛の実体に統合されているとも言える。この第8章最後の言葉は、単に信仰理解としてだけでなく、現実的な課題をも想起させる。例えば、「一つの愛とは」「神のためとは」「自分自身を愛するとは」「隣人を愛するとは」などがある。これらは、本論の目的である三位一体論が描く隣人愛に直結する課題と思われる。

C. アガペーとエロースの総合

上記のように、アウグスティヌスのカリタスを理解した段階で、序論で述べたニグレンの提起した問題を検討してみよう。ニグレンによれば、アガペーとエロースは歴史的にまったく異なった愛の形であり、カリタスは、異なった二つの愛を総合した歴史的に画期的な出来事であると言う。確かに、カリタスが純粋なアガペーだけであるかと言えば、そうではない。上述したように、神のために神を愛するだけでなく、神のために自分自身と隣人を愛するのである。「神を愛すれば愛するほど自分自身を愛する。」(8:8:12:3)とも語っている。従ってアガペーとエロースの総合であると言えるのかもしれない。

しかし、第8巻第7、8章でなされた愛に関する聖書解釈は、兄弟愛が中心である。自分自身を愛することは、最後のまとめで加えられたに過ぎない³⁴。兄弟愛から愛の三位一体論の構想すること、すなわち愛の実体が三位一体のひとつのペルソナと成り得るかどうかを論じているのである。カリタスの重要な点は、神の愛と自己愛の区別ではなく、神の愛と隣人愛

であり、自分自身への愛を含めて三つの愛を統合したことにある。

さらに、ニグレンはアウグスティヌスが神中心的でなく自我中心的であり、精神を探求して自己愛を優先したと批判的に捉える³⁵。本研究でも自己愛に偏って見える点を指摘した。しかし、上述したように、アウグスティヌスは聖書に忠実に兄弟愛に根差した愛の教えを説いており、純粋な精神から三位一体の探求を始めると語るのを筆者は信じた³⁶。アウグスティヌスは第15巻の精神の三一性モデルに続けて、隣人愛と三位一体論を論ずることはなかった。続いて執筆された『神の国』が『三位一体論』で残された課題を引き継いでいる³⁷。

以上の通り4.2は、愛の実体の視点にもとづくカリタスの考察である。ニグレンが指摘した問題についても、一定の判断を加えた。隣人愛を三位一体論の中で考察するというテーマは、ニグレンも指摘しているように、アウグスティヌスが残した課題である。これを解明しようとする本研究の意義は大きい。

4.3 パウロに見る義の形相

第9章は一つの節から成り、「なぜパウロの言葉に心が燃えるか。」がテーマである。パウロの次の言葉が長く引用される(455字)。

今や、恵みの時、今こそ、救いの日。わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように、どんな事にも人に罪の機会を与えず、あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、・・・悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのように、多くの人を富ませ、無一物のように、すべてのものを所有しています。(Ⅱコリ6:2-10)。

すでに第6章では、私たちが使徒を愛する根拠として「義の形相」が論じられた。第9章でも、このパウロの言葉を引用して「義の形相」を繰り返した後、議論は一步進んで「神の義」に及ぶ。「私たちは神において人間がそれによって生きるべきであると判断する義の不可変的な形相を観る。」(8:9:13:1)と言い、人間にある義の形相、神に観る義の形相を対比する。章の最後では、信仰の重要性について次のように語る。「だから、信仰はより明白に知られ、より堅く愛されるように神の認識と愛に有効なのである。」第9章は、以上のようにあらすじをつかみやすい章である。検討すべきことは、パウロの言葉をなぜこれほど長く引用して、結論の直前で信仰を語った目的である。

アウグスティヌスがパウロから大きな影響を受けたことは『告白』に克明に記されている³⁸。このパウロの長い引用は、文字数からすると『三位一体論』全体の中でも3番目の長さである。アウグスティヌスは、重要な聖書の言葉は文字数にこだわらず長々と引用する³⁹。まず、第9章の基本的な意図は二つあると思う。一つは、第7章の最後で「私たちは主イエス・キリストが御自身の模範によって私たちに教えられたように、兄弟の益となるため死ぬことが備えられ得るであろう。」という予告された議論であること。もう一つは、次の第8巻最後の部分に示された兄弟の一人としてパウロを挙げたことである。

さて、人間の眼で兄弟を見るが、それによって神を見ることは出来ない。しかし、人間の眼で見る兄弟を、もし霊的な愛によって愛するなら、愛そのものであられる神を内的な眼—それによって神は見られ得るのである—で見るであろう。(8:12:3)

引用されたパウロの言葉の中には、兄弟の益となって死ぬ喜びが書かれてあり、アウグスティヌスはパウロを彼を信じ、こよなく愛しているのである。もう一つは、聖書に記された神の義を、パウロを愛することによって観ることが出来ることを示そうとする意図である。聖書は神の義について次のように語る。

福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。(ロマ1:17)

ここで言う神の義とは、福音書に書かれているイエス・キリストであると聖書は語る。次の言葉が典型的である。

すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。(ロマ3:22)

もちろんキリスト教信仰においては、福音によってもたらされるイエス・キリストの義と比較しうるものは存在しない。そのイエス・キリストを一方において、第9章でパウロの生きざまを強調した意図は、パウロという実在人物を信じることにより神の義を理解できることを示そうとしたと思われる。それと共に、第7章から8章で論じた、愛の実体に関する理性的な議論に対して、イエス・キリストの義と愛という信仰的側面を強調して理性的側面とバランスを保とうとした意図があるのではないだろうか。信仰と理性を重んじるアウグスティヌスにとって、この第9章は最後の祈りにも相当する部分とも思われ、必要不可欠なのである。

4.4 善の愛

第10章は一つの節から成り、第8巻で論じてきたことの要点を簡潔にまとめ、三位一体の探求方針を結論として明らかにする。冒頭に善の愛を掲げる。

しかし、聖書がこれほど賞揚し告知する愛 (dilectio, caritas) は、善の愛 (amor) でないなら、一体何であろうか。

この言葉は、第6章以降に論じた愛 (カリタス) の対象が第3章で論じた善への愛 (アモール) であることを主張している。愛を表すラテン語には dilectio, caritas, amor 三種類がある⁴⁰。聖書が告知する愛をディレクチオ (dilectio) またはカリタス (caritas)、善の愛をアモール (amor) と表現する⁴¹。神を至高善とするアウグスティヌスにとって、善を情熱的に愛するのは当然である。続いて、三位一体を探求する方針を次のように語る。

しかし愛は或る愛する人の愛であり、愛によって或るものが愛されるのである。視よ、ここに三つのものがある。愛する人と愛されるもの、そして愛である。したがって愛とは愛する人と愛されるものという二つを一つにし、あるいは一つにしようとする或る生命でないなら、何であろうか。それは外的・肉的な愛についてもあてはまる。

「視よ」という言葉は、三位一体論の中で、特に強調する時にしばしば用いられる。ここで強調されたのは、「三つのものがある。」ということ。それは、「愛する人と愛されるもの、そして愛」である。愛する人と愛されるものは、一般的に実体とみなされるが、この二者に愛が実体として加わる三者の構図である。続いて、この愛に関する三者の構図を探求する方法について、次のように語る。

しかし、より純粹にして明らかな源泉から汲み取るために、私たちは肉を背後に措き精神に向って上昇しよう。友人において精神は精神以外の何を愛するであろうか。それゆえ、ここにも三つのもの、すなわち、愛する人と愛されるものと愛があるのである。ここから私たちはなお上昇し、人間に許される限り、より高いものを問い求めて行かなければならない。

ここでは、愛する人と愛されるものと愛の具体的な形が、精神と愛される精神と愛であることが示される。人間の精神を対象とするのは、純粹にして明らかな源泉から汲み取るためである。この精神の三要素は、既に第3章で回心する心の心理学的な分析で用いた概念と同様である。

章の最後には、「まだ問い求めていたものを見出したのではなく、それを問い求める場所を見出した」とあるので、神の三位一体を人間の精神に問い求める探求の方針が決まっただけである。人間を神の似姿と信じ、被造物に神性が見出されると信じるならば、被造物としての人間を対象とするのは当然の結論である⁴²。

5 結論

本論は『三位一体論』第8巻を対象に、「三位一体論が描く隣人愛」をテーマとする第三番目の論文である。1章から順に第10章までを三つに分けて、それぞれサブテーマを設けた。今回は、第6章から最終第10章を対象に「愛の実体の探求」をサブテーマとした。

まえがきでは、アウグスティヌスが『三位一体論』第8巻を執筆する前に、愛について論じた多くのものの中から、今回のテーマと密接に関係する以下の内容を概説した。

- (1) 『告白』第13巻：天地創造における聖霊と愛
- (2) 『三位一体論』第6巻：三位一体における聖霊と愛
- (3) 『三位一体論』第6巻：ヒラリウスの三位一体論

これらは「愛の実体」という、聖霊と深く係わる概念が、どのように誕生し発展したかを理解する上で重要である。天地創造における「愛の重さ」の概念は、愛の実体をリアルに表現する。第6巻は、第8巻以降になされる愛の三位一体論の全体的な下書きである。父と子をつなぐ^{ひも}紐、あるいは^{にかわ}膠など、愛の実体が印象的に表現され、ヒラリウスの三位一体論がアウグスティヌス独自の考察のモデルであることが確認される。

本論は、前回と同様に、デジタルデータベースを用いた要約を結果にまとめた。考察では、各章の重要なテーマについて、以下の題目を掲げて論じた。

4.1 義の形相に関する心理学的考察

4.2 カリタスと愛の実体

4.3 パウロに見る義の形相

4.4 善の愛

第10章には、第9巻以降で三位一体を探求する方針として、「愛する人と愛されるものと愛」という愛の三一性を人間の精神に求めることが結論として書かれている。それ以前の、第6章から第9章は、その方針に至るまでの愛の実体の模索が論じられている。

考察した内容は以下のとおりである。

- (1) 義の形相について心理学的（第6章）、信仰的に（第9章）論ずる。
- (2) 隣人や兄弟を愛することを、愛の実体と関係づけて論ずる。（第6章～9章）
- (3) 聖書にもとづくカリタスの信仰を、愛の実体と関係づけて論ずる。（第7章、8章）
- (4) 最高善を愛する人間の精神に、神の三位一体を探求する方針を示す。（第10章）

アウグスティヌスは序論に示したように、第8巻を執筆する以前から愛の三一性を心に思い描いていた。本論で扱ったテキストの部分では、三一性の一つとして、愛そのものを実体としてどこまで認識できるかが課題であった。義の形相に関する議論が説得力のある論証である。

今回、愛の実体という視点から、カリタスにおける愛の構造を明らかにした。併せて、ニグレンが提起した問題について一定の理解を示した。アウグスティヌスは自己愛を優先したのではなく、自己を愛するのは必然であって、むしろ隣人愛を強調したのである。カリタスは、神への愛、自己への愛、隣人への愛の三つが調和して一つの愛を示す三位一体の構造をしている。隣人愛を三位一体論の中で考察するというテーマは、ニグレンも指摘しているように、アウグスティヌスが残した課題である。これを解明しようとする本研究の意義は大きい。

凡例

- ・聖書は日本聖書協会「新共同訳聖書」を使用する。聖句の引用は、文書省略名に続いて章と節をコロンで区切り表示する。
- ・参考文献リストにある文献を引用する時は、書名を省略し文献リストの通し番号を [] 内に表示する。
- ・『三位一体論』の引用は、巻、章、節を：で区切り、カッコ内に表示する。段落は必要に応じて、節の次に：を置き、節ごとに最初から付番した段落通し番号を表示する。
- ・アウグスティヌスの『三位一体論』以外の著作を引用する場合は、著書の略称を最初に記して、続けて巻、章、節、段を同じように記す。例：(告白13:1:1)は『告白』第13巻1章1節、(教え1:1:1)は『キリスト教の教え』第1巻1章1節である。
- ・拙著研究ノート [3] [4] [5] に分かれて収録されている第15巻の要約を引用する時は、要約通し番号と要約対象部分を併せて表示する。例：2) (15:2:2-3)は、要約通し番号2) 要約対象部分が第15巻2章2節～3節である。

引用文献・注

- 1 [3]: 本論テキストとして用いた日本語訳。
- 2 「三一性」という用語はキリスト教の三位一体の神と区別するために、私たちが一般的に用いる三位一体の意味で用いられる。例えば、テキストでは「私たちが経験しているいわば多くの三位一体」(8:5:8) という内容は、「私が先ず被造物において、それ固有の或る種の三一性をとおして、いわば段階的に上昇し」(15:2:3) と表現されている。「精神の三一性」は、精神における記憶・知解・意志などが三位一体的に機能する性質。「愛の三一性」は、「三位一体が愛するもの、愛されるもの、愛という三一性と共に微光を放った」(15:6:10) にもとづく。
- 3 [5] [6] [7] [8]
- 4 [10] p.2: アウグスティヌスの三位一体論では、精神の三一性モデルと隣人愛の関係を論じていない。そのことが、第8巻第2論文において課題として明らかになった。
- 5 [9]: 第一論文、[10]: 第二論文
- 6 [4] p.41: ベネディクト十六世の最初の回勅「神は愛」(2006)の後半で、教会の社会教説について語る冒頭部分に「君が愛を見るなら、君は三位一体を見る。」を引用している。
- 7 ニーグレン【Anders Theodore Samuel Nygren】1890-1978 スウェーデンのルター派教会神学者、教会指導者。ルンド大学神学教授、のちルンドの監督。G.アウレンとともに新しい神学研究（モティーフ研究）を推進し、その学統はルンド学派と呼ばれる。キリスト教の愛の観念をこの方法で論じた《エロースとアガペー》(1930-36)が主著。世界教会運動にも積極的で、1948年の世界教会協議会結成に貢献し、47-52年にはルーテル世界連盟の初代議長として活躍した。【徳善 義和】世界大百科事典（第2版）
- 8 [11] “エロース” 参照2019-04-1: プラトンは、人間の生の営みの根底において働くエロースを、善美なるアイデアとの遭遇を目指す哲学（愛知）の道程を進める哲学的衝動として捉えている。プラトンのエロース論は、以後、新プラトン主義をはじめとするヘレニズム期の哲学者たち、および、ルネサンス期のフィチーノらに影響を与えている。キリスト教においてはしばしば、エロースは、神の上からの愛（アガペー）に対比され、人間の自己に向かう上昇的愛とされる。（抜粋）
- 9 [15] p.114注30: 「愛の問題は、アウグスティヌスの三位一体の思想にとって特別に重要であり、またこの点に関する彼の思想は、未解決の多数の問題を含んでいるので、アウグスティヌスにおける「愛と三位一体」に関する特別の研究は、大いに望まれることである。」「アガペーとエロース」の日本語訳は全3巻である。第3巻はアガペーとエロースの「総合」としてアウグスティヌスのカリタスの思想の卓越性を論証する。しかし、カリタスに内在する問題が、中世を経て宗教改革により「総合の破壊」として歴史的に更新されたとする。独創的な優れた著作であるが、一部に自己愛を強調しすぎているという批判もある。
- 10 [10] p.2
- 11 [2]: アウグスティヌスの『キリスト教の教え』（三巻）は三位一体論より少し前（397）に執筆され、第1巻ではキリスト教の愛（カリタス: *caritas*）の教えを解説している。次の章に詳しい。第23章 愛の対象は四つ、第25章 自己愛、第26章 愛の律法、第27章 愛の秩序、第28章 隣人とは誰か、第29章 神を愛する者の目的、第31章 神はどのように愛するか、第33章 われわれの愛の根拠
- 12 [14]: 執筆期間が『告白』（397-401）、『三位一体論』（400-416）とある。複数の説があるが、『告白』をほぼ書き終えてから『三位一体論』を書き始めたと考えるのが自然であろう。
- 13 [11] “ヒラリウス” 参照2019-03-18（抜粋）ヒラリウス〔ポアティエの〕Hilarius (315頃-367頃) 聖人（祝日1月13日）、教会博士。ポアティエの上層家庭に生まれ、修辞学、哲学の教養を有した。成人してから改宗し、350年頃にポアティエの司教に選出された。主著『三位一体論』（De

- trinitate) 冒頭には、自らの異教からキリスト教への精神的転回を、哲学的人生観と神理解から聖書とキリスト教信仰へ至る道程として描くくだりがある。
- 14 イザヤ書の主の僕をイエス・キリストに例えるなど、伝統的なものが多い。
- 15 [13] p.207：聖霊の働き（告白13:7:8）
- 16 [13] p.210：なにゆえ、聖霊のみが「水の面を覆っていた」のであるか（告白13:9:10）
- 17 [13] p.212：すべては神の賜物による（告白13:10:11）
- 18 [13] p.213：人間に見られる三位一体の象徴—存在と認識と意志（告白13:11:12）
- 19 聖霊も、父と子を結び、なお私たちをも父と子に結び付けられる至高の愛である—「神は愛である」（Iヨハ4:8）と記されているからそのように言われるのは正当である—（7:3:6）
- 20 この点について、アウグスティヌスはしばしば次の聖句を引用する。「唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です。この神に誉れと永遠の支配がありますように、アーメン。」（一テモ6:16）
- 21 [9] p.37：心は物体と同じように真理と異なる。（8:2:3:1）
- 22 [3] p.506注5）
- 23 「享受とはあるものにひたすらそれ自身のために愛をもってよりすぎることである。」（教え1:4:4）
- 24 付録 [7] 30) 15:26:45~33) 15:27:48 精神の三一性モデルは、子の誕生と聖霊の発出の違いを知識と意志の違いから再現できる優れたモデルである。
- 25 [9], [10]
- 26 [1] p.38：4. 1 聖書を論拠とする意味
- 27 今回、従来用いているテキスト [3] の日本語訳に意味が伝わりにくい部分があり、[1], [16] を参考にした。該当部分は注に記した。
- 28 「と（言う人がいる）。そんなことはない。」の部分は、[1], [16] の訳語である。[3] には、直前の文に引用符が無く、「ところが、どうであろう。」と訳されていて意味がよく伝わらない。
- 29 [1], [16] では、第3段落はIヨハ2:10の引用部分から始まっている。それ以前の部分は、君が愛を見ることの具体的な内容と思われるので、前の段落に含めた [1], [16] の方が適切と思われる。
- 30 [8] 表9から、第8巻第7章の節を表す8:10, 8:11で引用されている聖句を選ぶ。
- 31 復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。（レビ19:18）
- 32 第2段落は、[1], [16] を採用する。
- 33 [2] p.62, 63 隣人を愛するように命じ給うた主は、一人の例外も設けられなかったし、そのことを主みずから福音書の中ではっきり言われており、使徒パウロも明らかにしているからである。つまり、主は二つの戒めがある人に示して、律法全体と預言者はこの二つの戒めにかかっているとされた。そしてその人が「私にとって隣人とはだれか」（ルカ10:29）とたずねると、ある人がエルサレムからエリコに下ってくる途中で強盗にあった。そして彼らのために重傷を負い、半死半生のまま放置されたと言われ、隣人とはただその旅人を不憫に思って力づけ、介抱してあげた人に他ならないことをその人に教えられた。それはその質問をした律法学者みずからが、逆に主から問い返されて、隣人とはだれかを言うことができるようになるためであった。この律法学者に対して主は「行きなさい。そしてあなたも同じようにしなさい」（ルカ10:27）と言われる。隣人とは今必要としているときにはあわれみの義務を負い、将来万一必要ときには義務を返す人のことである。（教え1:30:31:2）
- 34 「だから戒めの目標は愛である。それは二つ。神と隣人への愛である。もしあなたが自分を全体として把えるなら、あなたの精神と身体を、隣人を全体として把えるなら、隣人の精神と身体を

愛すべきである。人は精神と身体から成っているからである。こうした愛すべきものはなに一つとしてこの二つの戒めから除外されていない。」(教え1:26:27:3)

- 35 [15] p.105: アウグスティヌスが神中心的か自我中心的かを論じている。
- 36 [3] p.252: 第9巻では議論を始める前に精神を似姿として次のように語る。「私たちの精神の弱さにとっては、おそらくこの似姿(精神)を直視するほうがより身近であり、より容易であるからである。」(9:2:2)
- 37 [14] p.134
- 38 [12] p.239: アウグスティヌスはプラトン派の書物に見られないものを見出そうと「使徒パウロの著作をむさぼるように読み」、その結果、「つねに同一の清らかな姿が、かれの貞節な言説を通じてわたしの目にみえたので、わたしは『おののきながら喜ぶ』ようになった。」とある。
- 39 [8] p.24表「特に長い引用部分」
- 40 [11] “愛” 参照2019-03-16: ラテン語には、*amor, dilectio, caritas* という単語があり、ギリシア語には、*erōs, philia, agapē* という単語がある。アウグスティヌス以降の思想家は愛に関する思想を展開する際、ギリシア語のエロース(*erōs*)に相当するアモール(〔ラ〕*amor*)を使うようになったが、この背景には、アガペーに代わってエロースが神に対する愛の意味で高い評価を与えられて使われるようになった事実があった。
- 41 [1] p.254: 泉 治典氏は、「善の愛」を「善への愛」と、次のように訳している。「そうだとすると、聖書がこれほど称賛し宣べ伝える愛(*dilectio vel caritas*)が善への愛(*amor boni*)でないとするれば、いったい何であろうか。」
- 42 [5] p.34, [8] p.26, [10] p.2: 「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」。(ロマ1:20)

参考文献

- [1] アウグスティヌス. アウグスティヌス著作集 第28巻. 泉 治典訳. 東京, 教文館, 2004, 571p.
- [2] アウグスティヌス. キリスト教の教え. 加藤 武訳. オンデマンド版, 東京, 教文館, 2011, 427p. (アウグスティヌス著作集6)
- [3] アウグスティヌス. 三位一体論. 中沢宣夫訳. 東京, 東京大学出版会, 1989, 540p.
- [4] 教皇ベネディクト十六世. 回勅 神は愛. カトリック中央協議会司教協議会秘書室研究企画訳. 東京, カトリック中央協議会, 2006, 94p.
- [5] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 研究ノート1”. 浦和論叢. Vol.54, 2016-2, p.33-61 (2016)
- [6] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 研究ノート2”. 浦和論叢. Vol.55, 2016-8, p.1-29 (2016)
- [7] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 研究ノート3”. 浦和論叢. Vol.56, 2017-2, p.97-125 (2017)
- [8] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 七つの聖句が描く三位一体論”. 浦和論叢. Vol.57, 2017-8, p.21-55 (2017)
- [9] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛: 第8巻で論じられる信仰と真理の形而上学的対比”. 浦和論叢. Vol.59, 2018-8, p.33-50 (2018)
- [10] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛: 第8巻にある回心する心の心理学的な分析”. 浦和論叢. Vol.60, 2019-2, p.1-23 (2019)

- [11] 上智学院新カトリック大事典編纂委員会. 新カトリック大事典. 電子版, 研究社, 2006. 研究社オンライン・ディクショナリー.
- [12] 聖アウグスティヌス. 告白 (上). 服部英次郎訳. 改訳初版, 東京, 岩波書店, 2012, 329p. (青805-1岩波文庫)
- [13] 聖アウグスティヌス. 告白 (下). 服部英次郎訳. 改訳初版, 東京, 岩波書店, 2013, 291p. (青805-2岩波文庫)
- [14] 服部英次郎. アウグスティヌス. 新装版, 東京, 勁草書房, 1980, 218p.
- [15] ニーグレン. アガペーとエロース 第3巻: キリスト教の愛の観念の歴史2. 岸 千年, 大内弘助訳. 2版, 東京, 新教出版社, 1974, 330p.
- [16] Edmund Hill, O.P.; John E. Rotelle, O.S.A.ed.. The Trinity. 2nd ed., New York; New City Press, 2015, 471p. (THE WORKS OF SAINT AUGUSTINE; A Translation for the 21st Century)

図表

表1：第8巻使用単語（章別・単語別集計表）

章	検索語	件数	章	検索語	件数	章	検索語	件数	章	検索語	件数
序	言	10	3	善	85	6	義人	47	7	愛	33
	三	9		心	49		心	46		神	23
	神	9		存在	17		愛	35		人	12
	語	7		意志	12		知	35		隣人	7
	子	7		愛	9		人	30		者	7
	父	7		他	8		見	28		言	6
	ペルソナ	7		見	7		何	25	為	6	
	聖霊	6		働	7		義	22	8	愛	92
	善	6		回心	6		自分	20		神	46
	1	真実		13	神		6	得		19	見
偉大		11	君	6	語	18	兄弟	18			
真理		10	4	或	6	自分自身	15	人	13		
子		10		愛	12	或	14	知	8		
父		9		神	11	身体	13	得	7		
大		8		心	10	認	12	言	7		
聖霊		6		知	8	形相	10	或	7		
所有		6		見	8	信	10	居	7		
多		6		得	7	人間	10	自己	6		
2		神		15	信	7	基	9	9	愛	14
	君	9		顔	7	他	9	生		13	
	心	7		信仰	6	言	9	神		8	
	光	6	5	知	21	アレクサンドリア	8	形相		7	
	思惟	6		三位一体	17	眼	8	信	6		
	真理	6		信	17	生	8	10	愛	18	
	大	6		愛	12	直視	7				
				何	12	カルタゴ	7				
				生	10	存在	6				
			見	10	自身	6					
		神	9	見出	6						
		死	6	誰	6						

注：「私」「彼」除外、6件以上 2018.10.07

謝辞

この研究は多くの精神的な障害を持つ方々との交流から始まりました。教会や職場、福祉施設での経験はたいへん私にとって貴重なものでした。2018年9月、名古屋で開催された日本基督教学会において、東京神学大学名誉教授の近藤勝彦先生、関西学院大学教授の土井健司先生とお話できる機会に恵まれました。お二人の先生から、アウグスティヌスの三位一体論研究の現代における意義を伺い、大いに励まされたことをここに感謝いたします。

Summary

The concept of love of one's neighbor as drawn from Augustine's Trinity theory :
Exploring the substance of love in Volume 8

Shuichiro Kunori

Augustine's "The Trinity" consists of 15 volumes. He began his own research in Volume 8 to explore the analogy of God in the human spirit. Based on his faith that "God is love," he created the Trinity model of God in the spirit of the logical consideration of the Trinity and the soul. From another point of view, this model beautifully expresses the human love for God and love for self, but it is not clear about neighbor love. The purpose of this study is to construct such a model for neighbor love based on Augustine's Trinity theory, and to use it in the future to construct a principle of social welfare. To that end, we have re-examined the arguments in order from the beginning of Volume 8 from the perspective of neighbor love. In this paper, we covered Chapter 6 of the eighth volume to the final chapter, Chapter 10. Based on his faith in the Holy Spirit and on love, St. Augustine revealed the form of righteousness and the substance of love contained in Caritas. In his conclusion, he presents the Trinity of Love as a quest. Through his argument, we learn that Caritas is a harmony of God's love, self-love, and neighbor love, though, we think that neighbor love is emphasized. If so, Augustine's original intention, which explored the Caritas-based Trinity, is completely in line with the purpose of this study. That purpose is to clarify the outline of the Trinity of neighbor love, which Augustine was unable to achieve.

Keywords Augustine, the Trinity, Volume 8, Caritas

(2019年5月16日受領)